

巻頭言

〈小特集〉 ダークツーリズムという問い

Special Issue: Dark Tourism as “Queries”

本特集は、2014年11月16日（日）、衣笠キャンパス清心館にて開催された、立命館大学人文科学研究所重点プロジェクト「グローバル化とアジアの観光」主催ワークショップ「ダークツーリズムという問い」において交わされた議論を中心としたものである。

ダークツーリズムは、それ自体が、3重の意味で問いそのものであると言える。

一つ目は「社会に対する問い」である。ダークツーリズムを通して、災害、テロ、戦争、貧困等を見つめ、社会そのものを再考することになるだろう。

二つ目は「ツーリズムに対する問い」である。「国の光を観る」をもって観光の語源とされてきたように、ツーリズムはこれまで、地域の美しい部分や素晴らしい部分を見たり体験したりするために移動する行為だとされてきた。だが、ダークツーリズムでは、そうした光の側面ではなく「ダークネス」の側面が重要となる。このように考えるなら、ダークツーリズムは「ツーリズムとは何か」という問いを提起することになるはずである。

さらに、この問いをつきつめていけば、「ダークネスとはそもそも何か？」という問いに突き当たらざるを得ない。「ダークネス」そのものが社会の中で創られ、つねにうつろいゆくものならば、「ダークネスとは何か？」という問いは「ダークツーリズムそれ自体に対する問い」に結びつくであろう。

本特集では、このようにダークツーリズムが「3重の＜問い＞」として存在することを議論の出発点にすえた。

まず遠藤論文は、観光をめぐる「ローカリティの政治性」が「ダークネス

に対するまなざし」を創りあげることが指摘するとともに、S. フロイトの概念「死の欲動」をキーワードとして現代社会との関連でダークツーリズムの意味を考察している。

市野澤論文は、日本とタイの災害記念施設を訪れる観覧者の経験への考察を通じ、ダークツーリズムの明白でありながら表立って語られてはこなかった楽しみと魅力の位相を明らかにしている。岡本論文はダークツーリズム論の問題視角から、現代のカトリック聖地巡礼、特に聖遺物を目指す巡礼における真正性を考察している。

須藤論文ではダークツーリズムの消費者と現代社会における死の意味との関係が明らかにされ、ダークツーリズムが「痛み」を持つ他者への「共感」や「連帯」へとつながる道筋が検討されている。最後に福間論文は、広島・長崎の戦跡史を比較対照し、被爆をめぐる「記憶の場」が創られるポリテクスを浮き彫りにしている。

読者の方々にはぜひとも、以上のような諸論稿をめぐって活発な議論をお願いしたい。それを契機にして、われわれは次に、「ダークツーリズム研究の新地平」を描き出す作業へと進んでいかななくてはならないと考えている。

2016 年 3 月

遠藤英樹・藤巻正己（立命館大学文学部教授）